



平安だより 2020年9月号 平安幼稚園

「自由のための不自由」 牧師・園長 北川正弥

『あなたたちがこれらの法に聞き従い、それを忠実に守るならば、あなたの神、主は先祖に誓われた契約を守り、慈しみを注いで、あなたを愛し、祝福し、数を増やしてください。』

旧約聖書 申命記七章一二〜一三節

旧約聖書によれば、神の民イスラエルは、神様を忘れてしまったために、エジプトで奴隷生活を強いられていました。でも忘れられた神様は、イスラエルを憐れみ、指導者モーセを使わしてイスラエルをエジプトから救い出したのだそうです。この「出エジプト」といわれる出来事はとても有名で、何度も映画化されています。1956年には「十戒」、1998年にはアニメーション映画「プリンストンエジプト」、2014年には「エクソダス 神と王」が公開されています。でも「十戒」を除くと他の2本の映画は、イスラエルの民がエジプトを脱出したところで終わります。前は海、後ろからはエジプトの戦車部隊（戦車といっても馬車ですけれど）が追いかけてくる、この絶体絶命の状況の中、モーセが祈ると、海が2つに分かれて、イスラエルは海の底にできた道対岸まで渡ることができた。ところが追いかけてきたエジプトの戦車は、戻ってきた水に飲み込まれたというのが映画のクライマックスです。でも聖書によると、これはまだお話の序の口に過ぎません。モーセの本当の苦労はここから始まるのです。イスラエルはエジプトで400年も奴

隷だったそうです。だからモーセと一緒にエジプトを脱出したイスラエルの民は、生まれてからエジプトを脱出するまで、奴隷の経験しかありませんでした。奴隷というのは自分のことを自分で決めることが許されません。だから彼らは、自分の人生を自分で決めたことがないので。それが急に道のない荒野で、自由を与えられたので困り果ててしまうのです。そこでイスラエルに神様がお与えになったのが「十戒」をはじめとする律法でした。1956年公開の映画「十戒」だけは、そこまで描いてくれています（そのかわり上映時間は232分ですが）。神様はイスラエルに自由を与えたかったのです。聖書によれば人間が人間であるために最も大切なことは、自分で考えて自分で決められる自由があることだからです。でもイスラエルを自由にするために、神様はあえて法律を与えました。何だか矛盾しているようにも感じられます。法律と言うのは、不自由なものという印象があるからです。でも人は一人ではありません。人の周りにはたくさんの方がいます。そんな中でもし誰かに完全な自由が与えられたら、その人の周りの人は皆不自由な思いをしなければならなくなります。人が同じぐらい自由であるためには、同じぐらい不自由を受け入れなくてはいけないのです。自由を知らなかったイスラエルに自由を教えるために、神様が法律を与えたというのはそういうことです。

幼稚園には自由遊びの時間があります。でもこの自由遊びの時間は実は自由ではありません。自由について学ぶ時間なのです。幼稚園にはたくさんのお友達がいます。そこでみんなが同じぐらい自由に遊ぶためには、同じぐらい不自由な思いをしなくちゃいけない、我慢をしなくちゃいけない、そのことを学ぶのが自由遊びです。これは神様がイスラエルに十戒を与えたのと同じ、自由のために自由を学ばせたのと同じ、とても大切な時間だと僕は思っています。